九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

低温国際会議LT25参上記 ： オランダ珍道中2008年夏

稲垣, 祐次
九州大学大学院工学研究院

https://doi.org/10.15017/14698

出版情報：九州大学低温センターだより. 3, pp.39-42, 2009-03. 九州大学低温センター
バージョン：
権利関係：

低温国際会議 LT25 参加記
～オランダ珍道中２００８年夏～

工学部　稲垣　祐次

２００８年８月６日午前８時過ぎ、私はオランダ・アムステルダムで開催される第２５回低温国際会議（LT25）に参加する為、福岡空港を飛び立った。約６０年前の同日ほぼ同時刻に広島で起こった惨劇を思い、機内で黙とうを捧げた。関空で KLM に乗り換え、直接アムステルダムへ飛ぶ。オランダは以前にトランジットで空港のみ利用したことがあるが、対応の悪さから印象は良くない。

あまり気が進まないが、何といっても今回の LT は特別である。２００８年は、オランダのカマリン・オンネス先生がヘリウムの液化に成功した１９０８年から数えて丁度１００年の節目に当たり、それを記念してのオランダでの開催である。

アムステルダムのスキポール空港では、先にハンブルグから到着していた吉田君と合流した。吉田君は現在、ハンブルグ大学でポスドクをしている。元気そうである。同機だった岡山大の神戸氏と３人で LT の会場であるアムステルダム RAI 国際会議場へと向かうことにした。会場で参加登録を済ませ、ウェルカムパーティーも早々に切り上げ、神戸大の面々と食事に繰り出した。料理はボチボチであったが、会話はそれなりに弾み、気付けば終電の時間。解散して駅に向かうが、結局、終電には間に合わず、仕方ないので吉田君とタクシーで予約を入れてある郊外の宿に向かった。宿は吉田君と神戸大の櫻井氏と３人で予約していたが、櫻井氏の姿が見えない。後で聞いた話では、関空発の飛行機の出発が遅れたせいで経由地のフィンランドで長時間滞在する羽目になり、結局、オランダに到着したのは翌日の午後であった。櫻井氏によれば、ホテルに電話して到着が遅れる旨、伝言を頼んだそうであるが、そんな話は聞いていない。電話ではフロントの人が「オ～ケ～、オ～ケ～、ノ～プロブレム～！」と叫んでいたそうであるが、陽気でその場しのぎの対応には思い当たる節がある。チェックイン時のフロントのオッサンだ。ヨレヨレのシャツを着て、少しお酒も入っているのか若干赤ら顔の陽気なオッサンは、支払方法に関してこちらが何を言っても聞く耳を持たない。不適切かもしれないが「オッサン」以外の表現を私は思い浮かばない。そのオッサン、決して悪い人ではない。会議の最終日、私は一足先に帰国したが、残っていた吉田君とギターを持ち出して盛り上がったようである。

滞在２日目の８月７日から本格的な会議がスタートした。ロンドン賞、サイモン賞などの受賞記念講演、プレナリーレクチャーが続く。今回のサイモン賞は NEC（RIKKEN）の蔡兆申（Jaw-Shen Tsai）氏と中村泰信氏が「超伝導体の量子コヒーレント状態に関する研究」で受賞された。調べてみると、１９５９年から始まる本賞を日本人が受賞したのは初めてのようである。ちなみにロンドン賞の方は、１９８７年に近藤淳先生が受賞されている。

３日目以降は朝から５会場でパラレルセッションがあり、夕方からポスターセッションのスケジュールで会議が進行していく。どのセッションも多くの聴衆で埋まってお

り、日本人も多く見られる。過去の統計によると、参加者は毎回１０００人～１５００人程度、その内、日本人参加者が２～３割を占めているそうだ。帰国すれば多くの雑用（特に最近では意味不明の雑用）が待ち受けている日本人研究者達。だけど、みんな楽しそうだ。Allez Japon!

昼食は毎日ランチボックスが支給される。パンが３個、リンゴひとつ、ドリンクのセット。これが毎日続く。かなり厳しい（図１）。パンが喉を通らない。櫻井氏はリンゴがいたく気に入ったようで、いつもリンゴだけ完食していた。夜は外食することになるが、これまた厳しい。オランダ人はあまり外食しないと聞いたことがある。そのせいか、気の利いたレストランは少ないように感じた。何度も中華、日本食にお世話になった(図２)。

食べ物は若干厳しいものがあったが、お店の人々の対応は良い。街行く人々も含めて、オランダ人は思っていたより気さくで、流暢な英語で親切に対応してくれる。滞在期間中、気分を害することは一度もなく、かなり印象が変わった。

滞在４日目の午後、ポスターセッションで自身の発表を行った。話を聞きに来てくれた“お客さん”はそれほど多くなかったが、一人、熱心に聞いてくれるフランス人と友達になった。見知ったアメリカ人を見つけて声をかけたが、最初、「お前誰だ？」みたいな対応で、すっかり忘れられていた。話すうちに思い出してくれたようだが。それにしても、海外に来ていつも思うことは、自身の英語力の低さである。正直、言語として英語が好きになれない。ともあれ、この日の発表を無事に終え、一息ついた。

図１　ランチボックスに閉口する面々。会場正面玄関にて。左から吉田（ハンブルグ大学）、鈴木（物性研）、立岩（原研）、辻（金沢大）（敬称略）。

図２　日本食に喜色満面の櫻井氏と吉田君。これがけっこう美味しい。

図３　ライデンで日本企業に勤めているらしい地元の二人組と。

図４　月曜日は閉館。

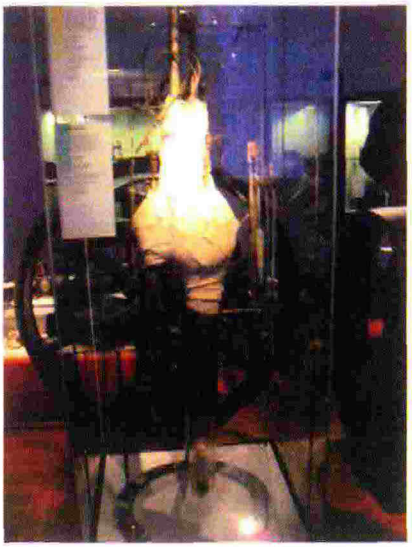

図５　オンネスのヘリウム液化機。ガラス製の５重管構造になっている。

さて、滞在５日目の８月１０日はライデンへのエクスカージョンだ。これに参加するために遥々オランダまで出向いてきたと言っても過言ではない。ヘリウムユーザーのはしくれとして、世界初のヘリウム液化装置を一度は見ておかなければならない。

早朝、学会会場に集合し、チャーターバスでライデンまで向かう。準備されたバスは１０台、参加者は６４０名！である。こんな参加者の多いエクスカージョンは体験したことがない。１時間弱、風車が点在する長閑な風景の中を走り、午前１１時頃にライデンに到着した。綺麗な街並みである。

昼食後、自由行動となった。午後からは低温の歴史に纏わるヒストリックレクチャーが開催されていたが、私と櫻井氏、それから物材機構の木俣君と３人でライデンの町を散策がてら博物館めぐりすることにした。木俣君は一眼レフのデジカメで、しきりに鳥の写真を撮っている。さすがは野鳥の会。

さて、お目当ての世界初ヘリウム液化装置はBoerhaave博物館というところに展示してあるようだ。迷いながらもなんとか博物館に到着した。思っていた雰囲気とは異なり、様々なものが展示してある。が、それら諸々の陳列物には目もくれず、低温関係の展示室へと急ぐ。展示室は２階のようだ。そしてついにその展示室に足を踏み入れた。あるある、当時の実験機器、オンネス達の写真。ヘリウム液化機を探す。「おー！あったあった！・・・あれ？」。あるにはあるが、陳列ケース内に収めてあるのは液化機の写真である。「うーむ・・・」。これを見る為に俺は遥々やってきたのか・・・。早々に退散することにした。博物館入口では続々とエクスカージョン参加者が入場していき、見知った面々ともすれ違う。感想を求められるが事実を告げるわけにもいかず、「まぁ、思ったよりショボイっすよ」とお茶を濁しておいた。

その後、シーボルト博物館などを見学し、自転車で転んで前歯がない地元の陽気な二人組みとカフェでビールを飲む（図３）。ベロンベロンに酔っているのと歯がないのとで、何を言ってるのかよくわからないが、何故か盛り上がった。午後５時からウェルカムパーチーに参加、それも早々に退散し、７，８人でタイ料理だったか、とにかくア

ジアンなレストランで夕食をとった。話題はやはりオンネスの液化機の話だ。だが、どうも話が噛み合わない。夕食後、櫻井氏と帰りのバスの時間までカフェで休憩していると、神戸氏が現れた。衝撃のあまり、よく覚えていないが、その時の会話はおよそ、下記のような感じであったと記憶している。

＜神戸氏＞

「いや～、すごかったね」
「あれ、見てないの？」
「そうかなぁ？水銀の４端子のやつとか
けっこう感動したけどな」
「一階の展示室にあったでしょ？液化機とか」
「・・・・（半笑い）・・・」
「アッハッハ！あれ見ないと意味ないじゃん」
「あれさ、わかりにくかったよね。俺達も
人に聞いて初めてわかったもん」

＜櫻井氏と私＞

「なにがっすか？」
「見ましたよ。しょーもない」

「ん？なんすか、それ？」
「一階？・・・・・・・」
「見てないわ。それ。」
「もしかして、やってもーた？」

「ワッハッハ！笑とけ笑とけ～！」
「しかし何百人という参加者の中で
見てないのワシ等だけよね？」
「このまま日本には帰れませんよ」
「もっかい来よか？」
「そーしましょ！」

以上のようなシュールな展開があり、翌、月曜日、我々は早起きして電車でライデンまでやってきた。賢明な読者の皆様ならもうお気付きのことと思うが、月曜日にである。前日の日曜日が開館だったことを考え合わせれば、休館日である可能性が極めて高い。実際その通りで、再び我々は返り討ちにあってしまった（図４）。こうなったら意地である。翌日、午後の便で帰国することになっていたが、三度、ライデンを訪れることにした。勝手知ったるライデンの町、迷うことなく博物館に到着し、禁断の展示室へと足を踏み入れた。念願のヘリウム液化機はガラスケースに囲まれ、そこに堂々と鎮座していた（図５）。感動である。目を閉じて１００年前の液体ヘリウム最初の１滴を想像してみる。１９歳の秋に読んだ伊達先生の

“「もうだめではないか」と誰もが思い始めていた。“

で始まるブルーバックスの一節を思い出していた[1)]。

感動を胸に私は機上の人となった。

本渡航は科研費（２０５４０３３５）の助成を受けたものである。

参考文献

１）伊達宗之　ブルーバックス「物性物理学の世界」　講談社